

普段通りに暮らしたい

認知症のわたし ③

1989年暮れ、東京都大田区に住む藤原瑠美(65)は、81歳になる母かをるの声で台所に向かった。

「瑠美ちゃん、どうしよう。紅茶の入れ方がわからなくなっちゃった」

パンと果物、紅茶の朝食を用意していた。それなのに台所に布巾や包丁が散乱している。着物姿で髪を整えた母が、体を震わせていた。

「大丈夫よ、ママ。こんなことよくある」。平静を装って肩を抱いた。薄々気づいてはいたが、ついにきたか。

母娘2人暮らし。東京・銀座の高級品専門店「和光」で宣伝企画部副部長をしていた。働きながら介護する、と決めた。それも明るく。

認知症という言葉はまだなかった。脳神経外科の医師は「1、2カ月で完全な寝たきり痴呆になる」と言った。

だが、かをるは寝たきりにならなかった。寝かせたままにしなかったからだ。ベッドから起こし、身支度をしていすに座らせる。トイレまでの3分を歩けるように歌でリズムをとるようにもした。

言葉を失うと、かをるは泣き声で尿意を知らせた。5人のケアチームは、泣き声の違いで意思をつかんだ。8年後

までオムツなし。週に1度は美容院で髪をセットし、明るい色の服を身につけた。給与の大半は介護費に消えた。

かをるを自宅で見とってから5年後、2005年に藤原はスウェーデンを訪ねる。映画「安心して老いるために」の監督、羽田澄子(86)がつくった北欧の資料ビデオをみて、認知症の人に対応するス

タッフの表情が明るいのに驚いた。日本の特別養護老人ホームの介護士は疲れきっている。どうしてこんなに違うんだろう。

人口3万人のエスロプ市。

案内された認知症のデイサービスでは、管理者だと思っただけ。あいつつした人が利用者だった。おしゃれな服、思い思いの髪形、伸びた背筋、笑顔。誰が認知症なのか、言われなければ分からなかった。

市の高齢者リハビリ部門の責任者スタッフアン・オルセン(49)は「安心して過ごせれば、認知症の人は自分の力を発揮できる。人と話し、体を動かす。居心地よくすることが何より」と教えてくれた。

藤原は現地に5回足を運び、計230日間滞在。現場の職員やみとりまで担う訪問スタッフ、市長らにインタビ

ューし、その成果を09年、「ニルスの国の高齢者ケア」に著した。

エスロプ市を藤原に紹介したグスタフ・ストランドル(38)は当時、日本でスウェーデンの福祉やケア方法を紹介する活動をしていた。

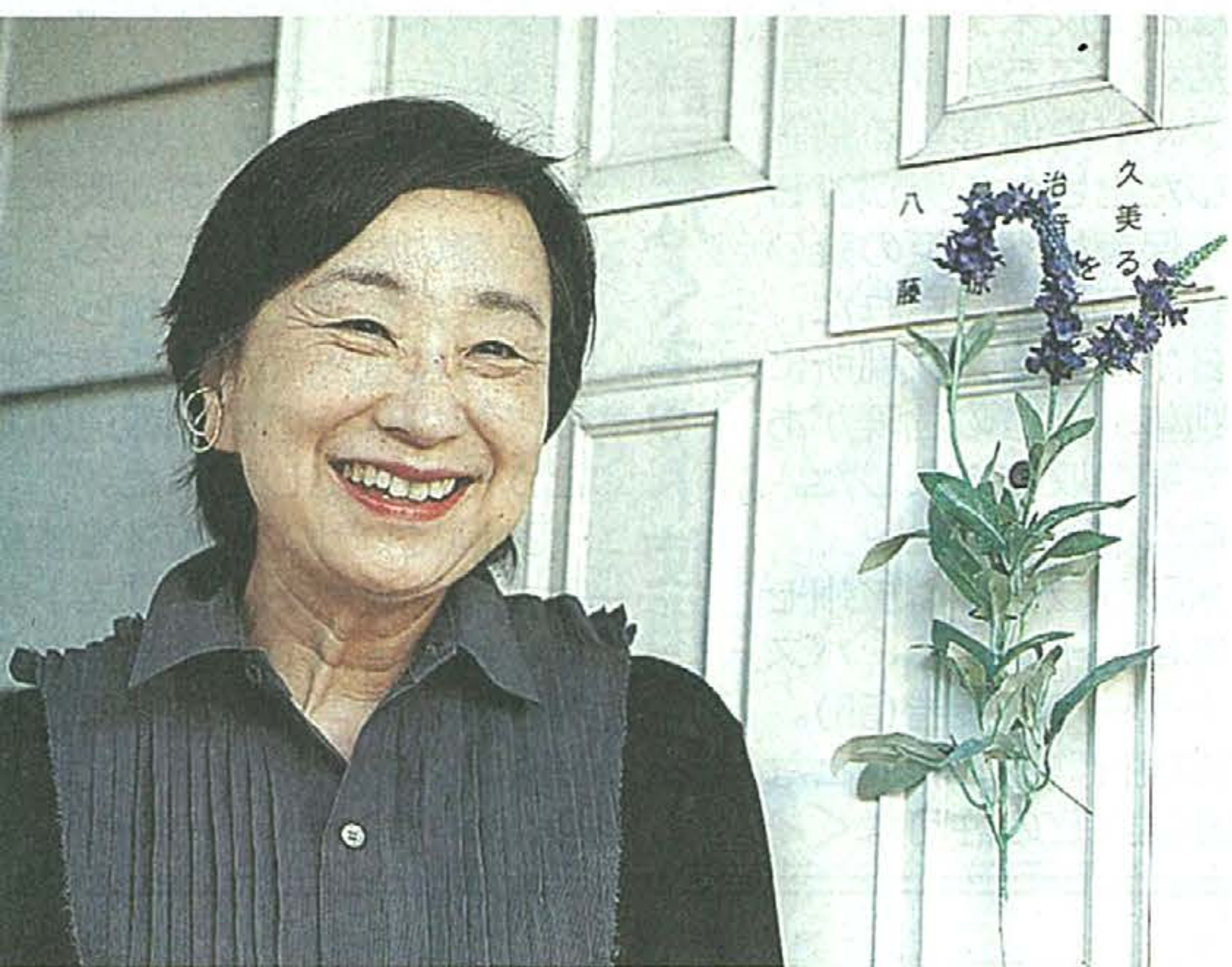
ストックホルム近郊で生まれ、中学時代に剣道に出会って日本に憧れた。高校2年のとき、最初の留学で10カ月滞在。多くの人に「スウェーデンは福祉の国だね」と言われる。二つの国を結ぶ役割を果たしたい。興味の対象が剣道から福祉にかわった。

大学生だった97年、留学生として再び来日した。東京の北欧料理店で経営者に自分の夢を語っていると、「詳しい人が来てるよ」。紹介されたのが、建築家で京大教授の外山義(山)だった。

外山はスウェーデンに7年留学し、高齢者の住環境を研究した。89年に帰国すると、相部屋が当然だった特養ホームに挑む。個室ながら共用スペースで家庭的な雰囲気もある施設を次々手がけた。02年に52歳で急逝する。

グスタフは外山の自宅に招かれて話し込んだ。日本で訪れるべき老人施設を紹介してもらい、これまでざっとで300カ所に足を運んだ。認知症の人がベッドに縛りつけられているのも見た。

09年、有料老人ホームなどを運営する千葉県浦安市の舞浜倶楽部を任された。「日本は少子化の中で、介護にかけられるお金も人材も足りていない」。理想を實踐してと請われた職場で、手腕が問われている。(岡本峰子)



①藤原瑠美さん
②グスタフ・ストランドルさん



(岡本峰子)